

■ まちづくりに関する提案 ～まちが今よりもっと楽しくなる「人の駅」づくり～

快適なまち、人々が暮らしやすいまち、楽しいまちとは地域の人々の交流が盛んなまち（地域コミュニティの形成がしっかりとされたまち）ではないでしょうか？

街なかの身近な地域交流の場としては公園や集会所などが挙げられます。しかし、イベントなどが行われない限り、日常はごく限られた人々の利用でしかないようです。例えば街区の中に点在している児童公園、近隣公園などは配置的には身近な緑の憩いのスペースであるはずですが、しかし、グランドゴルフや子供の散歩などをのそくと普段の生活で利用している大人がはたして何人いるでしょうか？また、子供も然りです。これは現在の公園の作り方にも問題があるのでしょうか、もっと人々が使いやすいような「身近なコミュニティスペース」を設けることが地域を活性化する近道だと思います。

何十年前前の日本の情景として思い浮かぶのは、夏の夕暮れ時、路地に縁台を出して将棋をさす爺ちゃん達や井戸端会議に花を咲かすおばちゃん達の姿です。その場所では地域の情報の交換などが頻繁に行われ、爺ちゃん達から子供達への知識の伝授もあったはずですが、これこそが地域コミュニティの原点ではないかと考えます。

そこで、まちを面白くする仕掛けとして、地域に数ヶ所、「縁台スペース」、「井戸端スペース」を創出してみてもどうでしょうか？

その場所は人の動線の横の小さな（畳一畳程度）の溜まりのスペースで十分です。動線上にあるということがその場所の賑わいや新たな交流を生み出す仕掛けとなります。

今風に言うならば、人々が集い、憩い情報や時間の共有ができる「街角サロン」。これを「人の駅」と名づけます。

道の駅は広域圏から訪れた人に対して地域の紹介や地域の物産などの販売等を行いますが、人の駅は、徒歩圏の人々に対する地域の紹介だけでなく、情報交換、文化伝承の場として活用され、新たなコミュニティの形成を促します。

縁台の設置場所としては、まちのあらゆる場所（公共用地）を対象とします。例えば商業地内、住宅地、団地内、河川沿いなど地域の交流スペースとしてふさわしい場所に設置します。また縁台は永久的な固定する物ではなく移動可能（取り替えが可能）なものとします。

しかし、ただ単に縁台を設置してその場所を自由に使ってください。というのであればそれらの利用はあまり見込めません。箱物をつくって終わりではなく、どう使うかのプログラム作りが大切なのです。そのためにはその地区のコミュニティ団体や住民などを取り込む必要があります。

そこで、縁台、縁台スペースの制作、配置計画等はワークショップ形式により地区の住民、町内会の協議のなかで決定することとします。ワークショップによって場所や物を創り上げてゆくことのメリットは、完成までに多数の人がかかわり、コミュニティの形成がはかれることと、ともにプロセスを共有することにより「自分達の場所」的な意識を芽生えさせることにあると思います。

縁台スペースは基本的には畳一畳が最小単位ですが、周りの修景なども合わせて行うことにより商業地や郊外、住宅地、河川沿いなどその場所に合わせた個性ある縁台空間が誕生します。例えば、商業地域であれば店先の公共スペースとして、住宅地であれば花々があふれる街角のコミュニティスペースとして、河川沿いであれば水と緑の憩いの場としてなどなど。

一般的に地域のつながりが強くなると外部の人々に排他的な印象を与えますが、「人の駅」はコミュニティ形成の場であるため、個々の縁台周辺の情報やイベントなどをチラシにして、他の縁台へ向け「縁台（井戸端）通信」を発行し、縁台間のネットワークの形成をはかります。

したがって、縁台の設置箇所数が多ければ多いほど人々のつながりは深くなり、例えば農村と都市間の交流など地域間の交流の拠点として、また商業地域内では行事のインフォメーションセンターとして機能するなど、様々な広がりが期待できます。

さらに、可能であれば縁台スペースに地域情報を発信する端末を設置したり、ホームページで情報を公開することなども人のつながりを密にする手段として考えられます。